法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-10

<文献紹介>近代日本の地域交通体系

YAMADA, Shinobu / 山田, 志乃布

(出版者 / Publisher)
法政大学地理学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理
(巻 / Volume)
31
(開始ページ / Start Page)
56
(終了ページ / End Page)
57
(発行年 / Year)
2000-03

【文献紹介】

近代日本の地域交通体系

三木理史（1999）：大明堂　A5版　366頁　本体5000円

本書は，著者が関西大学に提出した博士論文を公刊したものであり，著者の近年における研究活動の集大成といえる。本書は，「近代日本を対象とし，地域交通体系の変化に関わる問題を歴史地理学の立場から明らかにすること」を目的とし，「近代日本における地域交通体系が，1906年～1907年の『鉄道国有化』と1920年代末～1930年代にかけての『交通統制』を画期として，旧来の海運等基幹型から鉄道基幹型への変化が進行したことを実証すること」が内容の要約であるとしている。

そこで，本書の内容を目次に沿って紹介してみたい。

〈序論〉では，まず，「第1章　地域交通体系の課題と方法」において，既往の近代交通史研究を整理し，研究対象として輸送手段相互間の関連に注目する必要性，研究方法では巨視的研究と微視的研究の間隙を埋める方法を模索することが重要であることが指摘されている。具体的には海運等基幹型地域交通体系から鉄道基幹型地域交通体系への移行を検討する際に，「鉄道国有化」と「交通統制」を画期とする仮説を示し，末端輸送を担う局地鉄道の変化を指標とすることが有効であることを提示している。それを受けて，「第2章　局地鉄道事業の地域的展開」では，明治末期から大正期にかけて起こった「軽便鉄道ブーム」の地域的展開を全国的規模の地域交通体系との関わりからまとめ，局地鉄道の基本的性格を明らかにしている。

〈本論〉では，「第3章　鉄道基幹型地域交通体系の形成過程」とし，〈序論〉で示された仮説（「鉄道国有化」と「交通統制」を画期とする）を，局地鉄道の路線プランの改変から実証している。「第4章『鉄道国有化』と地域交通体系―瀬戸内海地域の事例から―」では，「鉄道国有化」に伴う具体的な地域交通変化の事例を提示し，「第5章商品流通と地域交通体系―山口県宇部炭鉱業地域の事例から―」では，商品流通網研究と交通路網研究の相互補完関係に着目し，近代の商品流通を代表する商品である石炭を事例として論じている。次に，「第6章『交通統制』と地域交通体系－昭和初期の三重県伊勢湾岸地域の事例から－」では，社会経済史の分野で蓄積されてきた産業統制研究（1930年代の経済統制・戦時統制における各産業の再編成）を踏まえつつ，従来の研究において等閑視されてきた交通事業の地域的再編成に注目している。

〈補論〉では，「第7章　局地鉄道の普及と「指導者集団」―才賀電機商会の事業展開からの考察―」とし，局地鉄道が地域交通体系の齟齬を埋める手段として広域的に普及した条件を，技術史的視点から明らかにしている。

〈結論〉の「第8章　総括と展望―局地鉄道からみた近代日本の地域交通体系―」では，「Ⅰ　近代日本における地域交通体系の変容」「Ⅱ　局地鉄道事業の展開」「Ⅲ　地域交通体系と局地鉄道の相互関係」「Ⅳ　東アジア，そして第二次世界大戦後への展望」と題し，これまで〈本論〉で述べられてきたことと今後の課題が簡潔にまとめられている。

以上，本書は，既発表論文を軸にしながらも，一貫したテーマで構成されており，わかりやすくかつ大変読み応えのあるものとなっている。

本書の論点は，日本経済史の分野において論じられてきた，「鉄道国有化」を契機とした交通体系の変化に，新たに「交通統制」という画期を加えたこと，その際，「局地鉄道」を中心とした「路線プラン」という新しい概念を導入し，その仮説を実証するうえでの「有効性」を論じることにあると思われる。

「路線プラン」については，第1章，第3章において詳しく述べられているが，幹線と支線の関係

に着目し（具体的には，幹線交通路と局地鉄道の起点・終点の結合状態），局地鉄道の起・終点地および経過地を一体のものとした路線の空間的パターンのことである。著者は，「第3-11図　我が国における鉄道基幹型地域交通体系形成の空間構造」において，このパターンの改変を全国的に概観したのちに，「鉄道基幹型地域交通体系」の形成過程を明快に図示している。この「路線プラン」という斬新な視角を導入することで，著者の仮説は見事に実証され，説得的なものとして論じられているといえよう（この3章は，1994年度日本地理学会研究奨励賞を受賞した論文に該当する）。

また，著者が提示する「地域交通体系」とは，様々なスケールで，様々な交通機関を含み，「面的」に展開した一定の地域内での総合的な「交通地図的」概念である。「交通史」という経済史の主要テーマを扱いながら，このように地域の「スケール」に着目すること，前述した「路線プラン」といい，極めて，「地理学的な」発想であるといえよう。しかし，本書の大きな魅力は，地理学の発想を十分に生かしながらも，地理学のみで通用する議論なのではなく，経済史など隣接分野との議論の噛み合いがとても良いことである。本書を読むと，幅広い分野からの文献収集，多くの資料保存機関からのデータ収集に圧倒される。著者の視野の広さとパワーが，本書の魅力を生み出したといえる。

最後に，筆者が本書を紹介した理由を述べたい。それは，著者の論文を読み，研究報告を聴き，そして著者と共に研究会活動を行うなかで，著者の「地理学観」に共鳴し，その著書をできる限り多くの方々に紹介したいと思ったからである。まさに著者の「一ファン」であるといえよう。

本書のあとがきには，その著者の「地理学観」の一部が文章で示されている。

まず，著者が高等学校時代に「地理」を履修することなく大学に進学した経歴を振り返った後に，「…地理学を学ぶ上で高等学校の「地理」の知識があるに越したことはないが，それがなくともやっていける懐の広さを地理学という学問はもっていると思っている。これからは「地理」未履修者に地理学の魅力をアピールしていくことが益々必要」であり，本書の執筆に際しては，「そのためにも地理学が，既往の地理学や地理学界の枠に拘らないことが重要ではないかと思う…（中略）地理学の方法論を大切にしながらも，一方でそれを過度に意識しないように心掛けた」と述べている。

さらに，本書の意義について，「地理学内部に向けては歴史地理学における近代研究の存在を，一方外部に向けてはこのようなテーマを歴史地理学としても研究できるということを，併せてアピールしたい」と述べ，著者の「地理学」と地理学以外の学問分野に対する研究姿勢が簡潔にまとめられている。この姿勢は，本書のいたるところから感じ取ることができよう。

著者はまだ30代前半の若手地理学者であり，今後も多くの魅力的な研究が公刊されていくことが期待される（ちなみに，本書以外にも『地域交通体系と局地鉄道の史的展開』日本経済評論社，が近刊予定である）。

山田志乃布（法政大学第一教養部）